

## 僕の怖いこと～思い出として残る意味～

恵み野中学校3年 菅原 康奨

毎年八月が来ると、考えることがある。それは人の死についてだ。

お盆になると我が家は欠かさず、お墓参りに行く。地元にも両親とも実家のお墓があり、両家のお墓に挨拶に行くのが毎年の行事だ。そして、「死ぬ」ということについて考える。

僕は最近まで、「死ぬ」ことが一番怖かった。その理由を聴いてほしい。

一番に思うのは、今までお世話になった家族や、沢山相談に乗ってくれた友達と会えなくなる。自分自身のすべてを忘れてしまうことが、恐怖の原因なのだと思う。人は、死ぬとどうなるのだろうか。

隣に住んでいる祖母は、いつも笑顔で祖父の話聞かせてくれる。祖父は、僕が二歳の時に交通事故で突然亡くなった。僕には祖父の記憶はなく、写真の姿の祖父を小さいころから「写真のじーじ」と呼んでいた。毎年のお墓参りに行くたび、祖父に会ってみたいと思う。サッカーを頑張っている僕になんて言ってくれるのだろうか。一緒にサッカーをしたり、教えてくれるのだろうか。とても優しくたと皆が言う「写真のじーじ」は、僕を送り迎えするために車を買って用意してくれていたそうだ。僕が遊びに行くと、いつも抱っこして可愛がってくれていたらしい。祖母と祖父は、とても仲が良かったようで、交通事故で突然祖父が亡くなった時、祖母はとても悲しみ、僕たち家族は祖母を心配して、半年くらい、一緒に住んでいたそうだ。その後、祖母の家の近くに家を建てて引っ越した。それから毎日のように祖母の家と行き来し、今も週に一回会いに行っている。遊びにいくと、いつも祖母は、「写真のじーじ」の前にきれいなお花を用意している。そして時々、祖父の話をして笑顔でしてくれる。お小遣いをくれるときにも、「祖母と祖父より」と書いてある。

最近になって、ふと気づいたことがある。祖母は、祖父が亡くなった後も、僕たちに忘れてほしくなくて、思い出を話すのかな、ということだ。「写真のじーじ」はいなくなってしまったけれど、みんなは笑顔で楽しそうにじーじの話をする。人は亡くなって消えてしまっても、心の中で思い出に残る。「写真のじーじ」は、きっとみんなに沢山、良いことや、優しさを与えたから、こんなにいい思い出があるんだな、とその時に分かった気がした。人は、この世に生きた時間の分、誰かに喜びを与えている。悲しみを与えることもある。それが人を強くする。たった二年しか一緒にいられなくても、僕はじーじの喜びだった。じーじも、僕の喜びだった。

これまで、死ぬことはとても怖いことで、死んでしまったらすべてなくなってしまうと思っていた。でもその気持ちが変わった気がした。

僕の母は看護師だ。よく人の死を目の当たりにしている母が、僕に言った言葉がある。「人はいつ死ぬか分からない。後悔のないように生きなさい。やりたいと思ったことは、後から

後悔しないようにやってみたらいい。失敗していいから。」

と。僕もいつ死ぬかは本当に分からない。思いやりを持って皆に接し、後悔のないように、やりたいと思ったこと、頑張りたいと思ったことは、精一杯頑張っていこうと思う。僕も「写真のじーじ」のように、死んだ後にも、みんなから笑顔で話をしてもらえるような人間になりたいと心の底から思う。それは、じーじの命をつなぐことだ。そうできたらじーじは消えてしまうことはない。

「死ぬ」ということについて考え、少しだけ、「怖い」と思っていたことが変わったのがうれしい。だから僕は、大人になっても毎年のお墓参りを必ず続けていこうと決めている。そうすることが今の僕にとって、そしてこれからの僕にとって、とてもとても大切であると思ったから。